

令和元年度 北九州市立自然史・歴史博物館 外部評価

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(カッコ内は目標値)	年報関連ページ	実績	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
1 資料収集・保管活動	1) 自然史系資料: 資料の計画的な収集とデータベース化によって、資料収集・保存機能を高めることができるか	資料収集	資料収集方針に基づいた収集・保存ができているか	p.39 添付資料1	資料収集方針に基づいた収集が行えた	B	蝶類ホロタイプ(4点)・バラタイプ(2点)、カミキリムシ類バラタイプ(6点)等の貴重な資料の寄贈を受けた。また、当館所蔵標本とミシガン大学古生物学博物館所蔵標本との交換や、次年度以降の特別展での展示効果向上のためのマウンテンライオン頭骨模型等の購入を実施した。	A	<p>・資料収集については、自然史・歴史両課とも収集方針に基づいた収集が行われている。特に、タイプ標本等の貴重な資料の寄贈を受けていることは、資料収集活動が学術コミュニティや社会から認められていることの表れであると考えられ、自然史系資料収集はAと評価した。</p> <p>・資料登録については、自然史・歴史両課とも登録数が減少している。特に自然史課の登録件数が大幅に減少しているが、一方で資料のデータベース構築の効率化に向けた新たな手法の検討に着手したことは、今後の資料の整理保管・活用の進展につながるものであり、両課ともにCと評価した。</p> <p>・上記の理由により、資料の収集および保管活動は総合的にBと評価した。</p>
		資料登録	新規登録点数(デジタルデータベース化点数)	p.39	258点	D	効率的なデータベース構築方法を再検討したことも影響しているが、実績は昨年度(1,529点)および過去5年度の平均(1,653点)を大きく下まった。	C	
	2) 歴史系資料: 資料の計画的な収集・整理・保存ができているか	資料収集	資料収集方針に基づいた収集・保存ができているか	p.40 添付資料1	資料収集方針に基づいた収集が行えた	B	銘菓「鶴の子」を製造・販売した小倉の菓子屋「福田屋」、北九州市を代表する企業家安川家、古布コレクション「襦袢」等、館を代表する資料群に新たな資料を追加することができた。また特別展の開催を視野に入れて、小笠原家ゆかりの馬具の複製を購入収集した。かように博物館資料を一定程度充実させることができた。	B	
		資料登録	新規登録点数(受入手続終了点数)	p.40	415点	C	資料の整理に努め、受入—登録手続きを進めた。昨年度(5,877点)より収集点数は大幅に減少したが、受入手続が終了した資料群は18件に及び、昨年度(同7件)に比べて2.5倍に増加している。	C	
< 総 合 >						C	資料収集方針に則り、自然史関係では蝶類のタイプ標本等、歴史関係では絵巻類や古文書、小写真、骨董品等、貴重な資料の収集を進めることができた。一方、自然史系資料については、データベース構築方法を再検討したこともあるが、登録点数が大幅に減少したことは反省すべきである。	B	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	年報関連ページ	実績	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
2 調査研究活動	戦略的な調査研究を実施し、博物館の調査研究機能を高めることができるか	研究業績	外部資金応募数・採択数(令和元年度申請数及びうち採択数)	p.51-52 添付資料2	28件申請 8件採択	B	日本学術振興会の科学研究費に20件、民間・大学の研究助成に8件申請し、前者は7件、後者は1件が採択された。	B	・外部資金獲得に向けた積極的な姿勢がうかがわれる。特に館長が代表者となり科学研究費を獲得し、自然史資料の新たな展示についての研究を学芸員と推進する等、博物館内でのチームワークを活かすとともに、各自が専門分野での調査研究を戦略的に行っており高く評価できる。 ・学術論文も、博物館学に関する論文から、専門分野を牽引するような国際誌に発表した論文に至るまで多彩であり、その質は高い。質の高い調査研究活動の結果が学会における論文賞受賞にも現れていると思われる。 ・学会発表も、博物館学に関するものから、専門分野におけるものまで多彩である。また、調査研究活動を反映させた普及書等の執筆も行われている。 ・上記の理由により、外部資金獲得による継続実施研究課題数をA、それ以外をBと評価した。
			外部資金獲得による継続実施研究課題数 *令和元年度開始分を含む	p.47 p.51-52	17件	B	科学研究費では研究代表者10件、研究分担者6件、計16件。民間・大学の研究助成1件。いずれも各学芸員が学術研究のネットワークを構築し、それぞれの研究課題に取り組み、各分野の研究の進展に貢献して博物館の存在感を高めている。	A	
			学術論文等出版数	p.47-49 p.51-52	40本	B	自然史系33本、歴史系7本。自然史系については、日本昆虫学会2019年度論文賞受賞論文等、各学芸員の調査研究の成果を数多く発表した。また館長と学芸員の共同研究として、塗り絵を利用した子供向けアンケートの有効性について検証する等、重要な問題提起をおこなうことができた。歴史系については、主要学会誌や研究書への論文掲載が少なかった。	B	
			学会発表数	p.49-51 p.52	37本	B	自然史系32本、歴史系5本。各学芸員の最新の調査・研究の成果を様々な学会で発表した。そのなかには夏の特別展とも関わって、「かべちよろ」に関する博物館展示の際のアンケート調査を分析した報告等、博物館学に関するものもあった。歴史系についてはもっと積極的に学会発表をおこなっていくべきである。	B	
			普及書等執筆数	p.49 p.52	10本	B	自然史系では博物館の自然史友の会や地元のNPO団体である魚部の機関誌への寄稿、また英文による寄稿などがあった(5本)。歴史系では北九州文化連盟の機関誌等で、博物館の歴史系展示の考え方や地域史の興味深いテーマについて紹介した(5本)。	B	
	<総合>					B	前年度に比べ、外部資金助成の採択数は同じであったが、申請数が増加していることは評価したい。また、専門誌での論文発表や全国レベルの学会での研究成果の発表など、学術研究機関として調査研究活動を着実に進めることができた。	B	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標（括弧内は目標値）	年報関連ページ	実績	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由	
3 展示活動	自然史、歴史に関する市民の興味関心を高めるとともに質の高い魅力ある展示ができていますか	総入館者数	総入館者数（450,000人）	p. 9	452,863人	B	コロナウイルス拡大防止のため約1ヶ月間休館したが、目標値とほぼ同程度の方に来館いただけた。	B		
		特別展観覧者数	特別展観覧者数（150,000人）	p. 13-17	198,482人	B	効果的な展示手法を考案・実施し、目標値を上回った。	B		
		特別展	春特別展 獣は毛もの		p. 13	体毛の多様性や機能をテーマとした特別展。総観覧者は47,859人。	B	動物を、ふわふわ・ごわごわ・すべすべ・ちくちくと、体毛の触感を基に区分して紹介するとともに、多数の触察標本を展示し、体毛の構造や役割の知覚化を試みた。デジタル顕微鏡で毛を観察するワークショップ等も実施し、多くの来館者に楽しみながら学んでもらうことができた。	B	
			夏特別展 探検！両生類・は虫類の世界		p. 14	両生類・は虫類の形態や生態の多様性等をテーマとした特別展。総観覧者は119,013人。	B	両生類・は虫類の多様性や進化の歴史、人との関わりを大型の剥製や骨格標本等を用いて紹介した。約100種の生体展示や触れる展示の導入等により、幅広い年齢層の来館者に好評を博した。	A	
			秋特別展 九州発！横方志功の旅		p. 15	横方志功の作品のみならず北九州との関係を紹介した特別展。総観覧者は8,456人。	B	横方志功の昭和29年の九州初個展、晩年の代表作「海道シリーズ」等の作品を展示するだけでなく、横方志功と地元の人々との多彩な交流を紹介することで、博物館ならではの展示会を開催することができた。また本特別展は東田ミュージアムパーク事業にかかる三館連携企画展の中核的な展覧会として実施し、隣接施設での展示主題に関わる連携や美術館とのトークセッション等の関連イベント開催により、連携企画展としての内実を深めることができた。	B	・特別展および企画展の展示テーマは、全体のバランスが良く、博物館のリーダーや新たな来館者の拡大を含めて、幅広く市民の興味関心を引き付けるものであると考える。 ・展示内容は、芸術作品を博物館らしい多角的なアレンジで展示解説していること、資料の収集・保管・研究という博物館の基本的機能を紹介し博物館活動への理解を深める企画を計画・実施していること、参加体験型のワークショップを積極的に企画していること等から、高い水準にあると評価できる。 ・さらに、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため約1か月間、休館したにもかかわらず総入館者数が目標値に達しており、特別展の観覧者数も目標値を上回っている点も評価される。
			冬特別展 コレクション大集合	自然史、歴史に関する市民の興味関心を高めるための効果的な展示が行われているか	p. 16	博物館が資料を収集する意義を知ってもらうことを目的とした展示会。総観覧者は23,154人。	B	博物館で資料を収集する意義を常設展示していないコレクションの中から精選した自然史系および歴史系資料約400点を紹介し、博物館が資料を収集する意義を知っていただいた。学芸業務や資料収集の意義について興味関心を持ってもらうためのワークショップも実施した。	B	・特に夏の特別展では、一部の子どもたちや大人に怖い等といった印象を持たれている両生類・は虫類をテーマにしたものであるが、生体展示に工夫を凝らすなど、幅広い年齢層の方に興味を持ってもらえる展示手法が考案されていたこと等から、Aと評価した。 ・以上のとおり、夏の特別展以外についてもこれに遜色ない十分な成果が得られており、概ね良いと評価されることから、総合評価をBと判断した。
		企画展	企画展（ほけつとミュージアム）		p. 18-21	○暮らしを彩る絨 ○大連・今昔の旅2019 ○北九州の木製品 ○細土の織物 小倉織 ○変わるわたしたちのくらし ○小笠原騷動と白黒騷動 ○世界遺産企画展2 炭都三池計7回開催。	B	常設展で普段公開していない博物館資料や市内の出土資料等を活用して企画展を実施した。季節感を出したり、市内のイベントと連関させるなど時宜を得ながら、多種多様な企画展を行うことができた。また、福岡県世界遺産室と共同で県内を巡回する企画展を実施した（ただしコロナ禍による休館のため極めて短期間しか公開できなかった）。	B	
			その他展示（短期展示など）		p. 22-23	クリスマス・干支絵馬展示計2回開催	B	クリスマスには生命の多様性館において来館者が記念撮影ができるトナカイとソリ、プレゼントのオブジェを展示した。正月の来館者に向けて、干支にかかわる動物標本を展示するとともに、来館者が願いごとを掛ける絵馬を掲示できるコーナーも設置した。また、ICOM京都大会に合わせ、京町屋において、色をテーマに日本の自然と文化の関わりを紐解く展示会を、11の自然史系博物館と共同で実施した。	B	
<総合>						B	特別展では様々な展示手法を検討・実施し、充実した内容の企画展も展開することができた。本年度（のべ224日）の合計特別展観覧者数は、昨年度（同230日）の188,033人よりやや多かった。また、複数の自然史系博物館とのユニークベニューでの展示を実施することができた。	B		

評価基準 A：大変良い、B：概ね良い、C：やや不十分、D：不十分

定量的な指標に関しては、主にA：≥120%、B：120～80%、C：80～40%、D：≤40%とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	年報関連ページ	実績	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
4 教育普及活動	博物館がセカンドスクールとして、子どもたちの来館機会を創出し、理科・社会科への学習意欲を持たせる仕組みづくりを進めているか	セカンドスクール事業(MT主務)	学校団体誘致活動回数(100社)	p.28	167 社	A	他部署(劉津の森公園、観光課)と連携して、昨年度163社を上回る167社を訪問し積極的に誘致活動を行った。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校誘致活動や多彩な体験活動等は、非常に精力的に実施され、数値的にもほぼ目標値を上回る実績をあげていると高く評価できる。</li> <li>・学校教育に加え、幅広い市民が参加できる様々なプログラムが企画されており、学芸員やミュージアムティーチャーの広い知見が活かされている。</li> <li>・年度末の新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う全国小中学校等での一斉休校措置等に伴う入館者数減についてはやむをえないと考える。その影響で数値的評価がBとなったものもあるため総合評価はBとしたが、A評価に近い実績であると考え。</li> </ul>
			社会見学・修学旅行等 入館団体数(1,000団体) 入館者数(70,000人)	p.29	947 団体 62,479 人	B	新型コロナウイルスの影響があり、昨年度(1,043団体、69,340人)を下回ったが、ほぼ目標値を確保できた。	B	
			体験プログラム等 実施回数(120回) 参加者数(5,000人)	p.29	130 回 6,275 人	A	化石発掘、レプリカ、昔の道具調べ等、効果的な体験プログラムを実施し、目標値を上回る回数、参加者を得た。	A	
			ミュージアムツアー入館団体数、入館者数(13団体、400人)	p.29	29団体、1,162人	A	ミュージアムパークツアーとして、昔の道具調べを実施し、目標値を上回る回数、参加者を得た。(令和元年度からの取り組み)	A	
	市民の知的ニーズに応じた効果的な生涯学習が実施できているか	教育普及講座類(学芸員主務)	館主催普及講座 開講数 参加者数	p.29-30	39 講座 1,202 人	B	ジオハイキングや恐竜すす払い、城跡を歩くなど自然や歴史に親しみをおぼえる講座等を開催した。	B	
		特別展関連普及講座等 実施回数 参加者数	p.30-31	58 回 14,850 人	B	ナイトミュージアムやギャラリートーク、ガイドツアーなど楽しみながら特別展の内容の理解を深めることのできる講座等を開催した。	B		
	<総合>					B	学校団体誘致活動に鋭意取り組むとともにセカンドスクール事業も積極的に展開し、延べ69,916人の参加者があつた。また、普及講座も39講座、58回開催し、約16,000人の参加者を得て自然史、歴史の理解促進につながつた。	B	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	年間関連ページ	実績	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
5 広報・情報発信活動	多様な広報媒体を活用し、特別展をはじめ博物館活動の情報発信に努めているか	特別展等博物館活動 広報・報道件数	広報・報道(市政記者クラブ)に情報提供した件数 (月1回の情報提供、ただし大規模特別展開催月(7月～12月)は月2回の情報提供 18件)	p.11	23件	A	特別展・企画展の開催広報等定例の情報提供に加え、「いのちのたび博物館入館者700万人突破記念イベントのご案内」等、トピックスとして7件を情報提供した。	A	・当該年度のホームページの充実やSNSの開設は高く評価できる。SNSを含む多様な広報媒体を活用した情報発信ができており、これまでの実績が市民に浸透してきた結果として、マスコミにも数多く取り上げられているので評価は高い。 ・学校への定期的な情報誌の送付や展示会の案内チラシの配布等の複数のルートを用いた広報活動も入場者数増につながっていると考える。 ・以上のように、全評価項目とも高い水準が達成されておりAと評価した。
			広報・報道で取り上げられた件数	p.11	・新聞 延べ21誌 300件 ・雑誌等 延べ42誌 66件 ・テレビ 延べ18社 223件 ・ラジオ 延べ13社 59件 ・インターネット 延べ36社 42件	B	積極的に情報更新し延べ130誌・社、690件取り上げられた。	A	
			ホームページアクセス数(400,000)	p.11	508,759件	A	ホームページの内容を充実し、アクセス件数が目標値を上回った。	A	
			SNS(twitter, facebook)での情報発信数 (1週間に3回の情報発信、ただし大規模特別展開催月(7月～12月)は週5回の情報発信 約210件)	p.12	412件	A	目標値を大きく上回る情報発信を行った。 新たにInstagramを開設した。	A	
			<総合>				A	報道各社に情報提供するとともにSNSでの情報発信にも積極的に取り組み、マスコミなどで690件取り上げられた。また、ホームページのアクセス件数も目標値を上回った。	

評価基準 A:大変良い、B:概ね良い、C:やや不十分、D:不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120～80%、C: 80～40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	年報関連ページ	実績	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
6 市民との協働	博物館ボランティア(シーダー)の参画により市民との協働による取り組みが進められているか	博物館ボランティア(シーダー)の活動	シーダー登録者数(50人)	p.35	58人	B	昨年度(62人)より若干減少したが、目標値を上回っている。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>多くの市民がボランティアや友の会に参加し、学びを深め、活発な活動を行っている。特に歴史友の会の講演会は一般市民の聴講も可能で市民を博物館につなぐ役割も果たしており、開催回数、参加者数ともに充実している。</li> <li>ボランティアや友の会と協働することにより参加者数、活動数や内容ともに、目標とする成果は概ね達成されている。</li> <li>自然史友の会の冊子の発行については、例年の4冊に加え、今年度は特別号の発行を支援していることは高く評価できる。</li> <li>上記により、博物館として支援して発行した冊子類発行数が例年を越えたものをA、それ以外をBと評価し、総合評価をBとした。</li> </ul>
			延べ活動回数(シーダー年2,400回)	p.35	2,651回	B	昨年度(3,225回)より減少したが、目標値を上回っている。	B	
			シーダーゼミ実施回数(毎月1回)	p.35-36	10回	B	昆虫や小倉城の講話を行う等、自然史、歴史関係に関して幅広くシーダーの能力向上に資する研修を実施した。(3月は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止。)	B	
	友の会の活動を支援するなど、友の会と連携できているか	「自然史友の会」の活動	講座 実施回数 参加者数	p.37	3回 46人	B	市民の植物に対する興味関心を高めることに繋がる講座「植物細密画を描いてみよう！」を2回、会員向け講座「火山灰のなぞ」の実施を支援した。	B	
			冊子類発行数	p.37	5冊	A	機関紙「わたしたちの自然史」を例年の4冊に加え、特別号1冊の発行を支援した。	A	
			研究部会開催状況	p.37	45回	B	市内の生物相調査等、博物館の調査研究機能の強化に繋がる活動を共同で実施した。	B	
	「歴史友の会」の活動	講演会 実施回数 参加者数	p.38	10回 1,250人	B	細川忠利や伊都国、ペリー来航や世界遺産古市古墳群、沖ノ島や蒙古襲来等、地域の歴史や会員の関心の高いテーマで内容も充実した講演会を実施した。	B		
		史跡めぐり 実施回数 参加者数	p.38	4回 139人	B	広島県呉市、福山市、山口県萩市、大阪府堺市、大分県大分市等の遺跡、史跡や博物館施設、神社仏閣等をめぐり内容充実のツアーを4回実施した。	B		
		歴史友の会だよりの発行回数	p.38	3回	B	会長の「元号について」をはじめ、会員の地域の歴史に関する寄稿、学芸員の調査報告等を掲載した会報を3冊発行し、地域の歴史に関する会員相互の情報交換に寄与した。また25周年記念号として増ページし、会の軌跡をまとめた。	B		
	<総合>					B	ボランティアや友の会活動を支援するとともに友の会やボランティアと協働した取り組みにより、博物館の運営に大きな役割を果たしてもらったことができた。	B	

評価基準 A:大変良い、B:概ね良い、C:やや不十分、D:不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	年報関連ページ	実績	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
7 社会貢献	学術研究機関として社会に貢献し、シンクタンク機能を果たすことができるか	学術研究機関として、大学等外部機関への支援ができていますか	委員等就任 人数 件数	p.32-34	17人 61件	B	環境保全関連委員会委員や文化財審議員等に就任し、行政機関等への支援を行った。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学芸員の高い専門性が評価された結果、環境保全関連委員会委員や文化財審議員等として幅広い社会貢献が行われている。また、学会の役員として学会運営や学会誌の編集にも携わっており高く評価できる。</li> <li>・大学の非常勤講師を含めた教育機関や市民センター等での講義や講演等学芸員の専門的知識を活かした活動も活発に行われている。</li> <li>・資料の観覧や貸出は、国内のみならず国外からも依頼を受けている。このことは、博物館が学術研究機関として日本国内で社会貢献するのみならず国外の学術コミュニティにも一定の認知がなされており、貢献していることを示している。</li> <li>・以上のことから、外部機関の依頼による講演などの対応回数をB、それ以外の項目をAと評価し、総合的に国内外への学術的・社会的貢献が十分行われていると考えAと評価した。</li> </ul>
			外部機関の依頼による講演などの対応回数	p.32	54件	B	小、中、高、大学の教育機関や市民センター等の公共施設での講演等、学校教育・社会教育への支援を行った。	B	
		資料貸出	資料貸出者(団体)数 貸出点数	p.42-46	55人(団体) 827点	B	他博物館等からの要請に応じ、学術研究や教育普及活動の支援を行った。(標本データの提供を含む。)	A	
<総合>						B	大学教育や小、中、高校の教育を支援するとともに、行政機関や他博物館からの協力要請に積極的に対応、社会貢献を行った。	A	

評価基準 A:大変良い、B:概ね良い、C:やや不十分、D:不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由	意見
1 資料収集・保管活動	C	・資料収集方針に則り、自然史関係では種類のタイプ標本など、歴史関係では縮刷類や古文書、小写真、骨董品など、貴重な資料の収集を進めることができた。一方、自然史系資料の登録点数は、データベース構築方法を再検討したこともあるが、大幅に減少したことは反省すべきである。	B	・自然史・歴史両課とも、資料収集は質量ともに館の収集方針に沿った一定の成果が得られており、とくに自然史系の収集内容は学術コミュニティや社会への貢献度合いが高かった。 ・新規データベース化点数の大きな減少はあるが、自然史資料のデータベース構築の効率化に向けた新たな手法の検討に着手したことは、資料の整理保管・活用の進展につながる。	・資料登録全般：評価視点に「公開」（収蔵品分野名リストなど、今後は概要公開から始めて、将来的に整ったときには収蔵数やデータベース公開へと進めていくのはどうか）を入れたり、自己評価の理由欄には「累計登録数は、〇〇点に達した」と加えてはどうか。 ・自然史系での幅広い視点での資料収集、歴史系での子どもたちのシブクプライドの醸成につながる資料展示の工夫を期待する。 ・自然史系資料の登録数は、データベース構築方法を再検討したこともあり大幅に減少したようであるが、今後に期待したい。
2 調査研究活動	B	・前年度に比べ、外部資金助成の採択数は同じであったが、申請数が増加していることは評価したい。また、専門誌での論文発表や全国レベルの学会での研究成果の発表など、学術研究機関として調査研究活動を着実に進めることができた。	B	・自然史系の学術論文業績は特に優れており、自然史歴史ともに博物館学に関する論文から、専門分野を牽引するような国際誌に発表した論文に至るまで多彩であり、その質は高い。質の高い調査研究活動の結果が学会における論文賞受賞にも現れていると思われる。 ・学会発表も博物館学に関するものから、専門分野におけるものまで多彩である。研究業績は、学芸員個々が専門分野での調査研究にしっかり努力している結果であると評価できる。 ・外部資金獲得数も充実しており、多くの調査段階のテーマや新たなテーマ構想も生まれつつあり、今後の更なる学術論文公表が期待できる。	・館長を含め16件の科学研究費を獲得していることは優れていると考える。 ・一般的な科研の採択率が25%程度であることを考えると、館職員が代表で申請した科研の採択率が50%に達していることには感心している。 ・歴史系において、さらに学術論文等出版数や学会発表数が増加することを期待する。
3 展示活動	B	・特別展では様々な展示手法を検討・実施し、充実した内容の企画展も実施することができた。本年度（のべ224日）の合計特別展観覧者数は、昨年度（同230日）の188,033人よりやや多かった。また、複数の自然史系博物館とのユニークメニューでの展示を実施することができた。	B	・各特別展のテーマは、分かりやすく興味を惹くものであり、テーマのイメージを親しみやすいものに変える戦略や多角的なアレンジもみられた。また体験型ワークショップ等の企画も来館者増加につながっていると考える。 ・全体的に、博物館のリピーターや新たな来館者の拡大を含めて、幅広く市民の興味関心を引き付ける構成となっていた。 ・新型コロナウイルスの感染拡大防止のため約1か月間、休館したにもかかわらず総入館者数が目標値に達しており、特別展の観覧者数も目標値を上回っている点も評価される。 ・これまでの業績の蓄積を背景にして十分に成果を出している。	・評価指標を、次のようにしてはどうか。ア) 自然史、歴史に関する市民の興味関心を高めるための効果的な展示が行われているか、イ) 博物館のあり方において重要性の高い内容の自然史、歴史の展示が行なわれているか、ウ) 個々の特別展における目標観覧者数が達成できているか。 ・博物館が膨大な資料を収集・所蔵し学術的な研究を深めていることの意義等を市民に知ってもらう機会を今後も工夫・継続していただくことを期待する。
4 教育普及活動	B	・学校団体誘致活動に鋭意、取り組むとともにセカンドスクール事業も積極的に展開し、延べ69,916人の参加者があった。また、普及講座も39講座、58回開催し、約16,000人の参加者を得て自然史、歴史の理解促進につながった。	B	・学校誘致活動や多彩な体験活動等は、非常に精力的に実施され、数値的にもほぼ目標値を上回る実績をあげていると高く評価できる。 ・年度末の新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う全国小中学校等での一斉休校措置等に伴う入館者数減についてはやむをえないと考える。 ・学校教育に加え、幅広い市民が参加できる様々なプログラムが企画されており、学芸員やミュージアムティーチャーの広い知見が活かされていると評価できる。	・参加者が少ない講座については、幅広い市民に案内が行き渡っていない可能性を考慮し、広報に工夫をすることが期待される。 ・学校関係の積極的な活用、特に中学生以上の見学や授業での活用が進むことを期待する。 ・学習指導要領改訂に伴い、中学校理科の生物に関する学習内容の履修学年に変更が生じており、「利用の手引き」ワークシートの該当学年を見直す必要がある。
5 広報・情報発信活動	A	・報道各社に情報提供するとともにSNSでの情報発信にも積極的に取り組み、マスコミなどで690件取り上げられた。また、ホームページのアクセス件数も目標値を上回った。	A	・当該年度のホームページの充実やSNSの開設は高く評価できる。SNSを含む多様な広報媒体を活用した情報発信ができており、マスコミにも数多く取り上げられているので評価は高い。 ・学校への定期的な情報誌の送付や展示会の案内チラシの配布等の広報活動も入場者数増につながっていると考える。 ・以上のように、検討したすべての項目が目標以上に達成されていると評価される。	・市内小中学校等の教職員を個人利用も含めて減免の対象にし、手続きも簡易にしていたことは、学校団体での活用の促進だけでなく、教職員の教材研究や子どもたちへ博物館利用の価値を積極的に伝えることにもつながっている。
6 市民との協働	B	・ボランティアや友の会活動を支援するとともに友の会やボランティアと協働した取り組みにより、博物館の運営に大きな役割を果たしてもらうことができた。	B	・多くの市民がボランティアや友の会に参加し、各分野の学びを深め、活発な活動を行っており、それらに十分な支援を行えた。また参加者数、活動数や内容ともに、目標としていた成果は達成できていると評価される。	・友の会やボランティア活動が、高齢者の生きがいづくりに寄与できるものになるよう検討いただきたい。 ・友の会やボランティアに、より多くの若者が参加できるような方策を検討いただきたい。
7 社会貢献	B	・大学教育や小、中、高校の教育を支援するとともに、行政機関や博物館からの協力要請に積極的に応え、社会貢献を行った。	A	・専門性を活かした各種の委員会や生涯学習に対して目標以上の支援が行えている。学術研究機関として日本だけでなく、国際的にも学術コミュニティに貢献している。	
総合評価	B	・博物館に求められている活動の多くは、概ね評価指標を達成できた。ただし、資料収集・保管活動は目標値を達成することができます。今後、さらなる努力が必要である。また、広報・情報発信活動、市民との協働、社会貢献の面でも効果的な活動が展開できた。 ・一方、当該年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため年度末の33日間を休館したが、目標値（45万人）とほぼ同程度である45.2万人に入館いただくことができた。なお、休館中は再開館に向けた課題の抽出や対策の検討、新たな博物館活動の考案などを、全職員で分担して実施したことを付記させていただきたい。	B	・博物館が「有する人的・物的財産を強みとし、これまでの活動で蓄積してきた多彩な収集資料を中心とした効果的な展示会が企画実施できている」。 ・展示等の博物館活動に関しては、工夫された展示内容が幅広い市民の期待に応え、さらに多様な広報媒体を活用した積極的な情報発信が行えており、その結果が、観覧者の増加に結びついていると思われる。 ・学芸員による資料収集・保管とそれに基づく調査研究活動は活発であり、その成果を市民の生涯学習に活用するとともに、論文や学会発表等としても公開できている。これらの活動が高く評価された結果、行政機関や他の博物館からの協力要請、ならびに小、中、高、大学から教育支援の依頼があり、それらに積極的に応えることにより、社会貢献もできている。 ・以上のとおり、ほとんどの項目で目標が十分に達成されているが、今後のさらなる躍進を期待し、総合評価をBとした。	・博物館の「理念と方向性」には、「ミュージアム・ネット化構想」がある。これをすすめることが課題だと考えられ、そのための評価項目があるとよい。「1 資料収集・保管活動」のなかにデータベース構築・公開を入れるとするなら、今後は、動画他、新たな博物館のウェブ発信に向けた業務を担う新たな部門、または博物館資料整理の専門家や（デザイン発信・国際的）人材の確保等が必要になるのではないか。また、これは「7 社会貢献」の資料貸出にもつながってくる。資料をデータベース化することで、画像情報のみを必要とする人については、貸出を依頼しなくても、国際的にも、ウェブ上で観察することが可能になる。 ・新型コロナウイルス感染収束後、以前にも増して学校関係の積極的な活用、特に中学生以上の来場者数の増加や授業での積極的な活用が進むことを期待したい。

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分  
定量的な指標に関しては、主にA: ≧120%、B: 120～80%、C: 80～40%、D: ≦40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。